



チイちゃん

犬 | オス（去勢済） | 2歳

検査日：2026-09-02

飼い主さま：健康診断 太郎 さま

担当獣医師：山田太郎

テスト1動物病院

 体重：3.5kg  体温：38.5℃

経過観察

次回受診目安：2027-03-29

B

次回の推奨追加検査

血液検査

フィラリア子虫検査

日帰りでのお預かりが必要な検査が含まれています。お時間 - に余裕がある日のご予約をお勧めします。



獣医師からのメッセージ

今回の検査では全ての検査項目において大きな異常はありませんでした。
そのため、今後体調の変化がなければ次回の来院は半年後の検診などで問題ありません。

検査ごとのまとめ

A. 血液検査

 経過観察

B. 身体検査

 経過観察

C. 画像診断（レントゲン・エコー）

 経過観察

D. 尿検査

 異常なし

獣医師からのご提案



推奨サプリ・フード

テストサプリA

テストフードA



生活習慣
アドバイス

- おやつをカロリー10%以内にしましょう
- 低カロリーを意識した食事にしましょう
- 足腰に負担の少ない「芝生の上」や「水中ウォーキング」などを取り入れましょう

該当商品をご購入希望の場合はLINEでクリニックにお問い合わせいただくか、院内でスタッフにお声がけください。

01 腎臓のはたらき

今回の評価（総合的な判断）

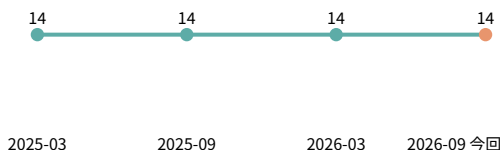
腎臓の働きを確認する項目では、
SDMA、クレアチニン、BUN、リンはいずれも基準範囲内でした。
SDMAは基準値の上限となる14ですが、
過去の検査でも同じ14で推移しており、
今回だけ大きく上昇した様子はみられません。
また、クレアチニンやBUN、リンについても基準範囲内を維持しています。
尿検査でも尿中蛋白／クレアチニン比は基準範囲内でした。
今回の検査値からは腎臓に関する大きな変化は確認されていませんが、
腎臓の状態は複数の検査結果や経時的な変化をあわせて確認していくことが大切です。
今後も健康診断の際に同じ項目を継続して測定し、
数値の変化がないか定期的に確認していきましょう。

SDMA

14 µg/dL

腎臓から排泄される老廃物です。筋肉量の影響を受けにくく、
クレアチニンなどの他の腎臓に関する数値よりも異常を早期に
発見できる可能性が高い項目です。

過去推移



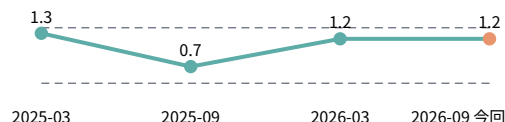
クレアチニン

正常

1.2 mg/dL

腎臓から排泄される老廃物であり、腎臓の濾過機能を反映する
代表的な数値です。数値が高い場合には、検査のエラーや
高脂血症の可能性もありますが、腎臓の機能低下が疑
われます。数値が低い場合には、筋肉量の少なさや妊娠が疑
われます。腎臓の状態をより正確に把握するには、
血中尿素窒素、SDMAなどの血液検査や尿検査、画像診断と組
み合わせて判断します。

過去推移

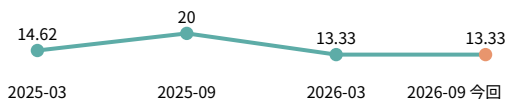


BUN/クレアチニン比

13.33

BUNとクレアチニンのバランスから、腎臓の機能低下の種類を
推測する手がかりになる数値です。高い場合には、腎臓以外の
原因、クレアチニンの腎臓以外の要因での低下の可能性も疑
われます。低い場合には、腎臓の異常が疑われますが、
水分摂取量や食事習慣の影響の可能性も疑われます。腎臓以外
の影響を受けやすいため、SDMAなどの他の血液検査や
尿検査、画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移



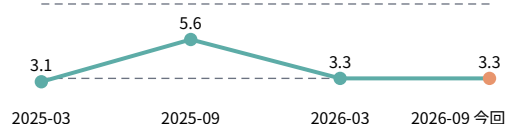
無機リン

正常

3.3 mg/dL

カルシウムと一緒に骨や歯を作る、エネルギー代謝にも関わる
ミネラルです。数値が高い場合には、腎臓や副甲状腺の異常が
疑われますが、成長期の場合やビタミンDの過剰接種の影響を受
けて数値が上がる場合があります。数値が低い場合には、
副甲状腺の異常、糖尿病が疑われますが、ビタミンD不足や
出産前後にも影響を受けて数値が下がることがあります。腎臓
の状態を評価する際はカルシウムなどの血液検査や
症状、画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移



02 肝臓・胆道の状態

今回の評価（総合的な判断）

肝臓に関連する項目のうち、

ALPがわずかに高値でした。

一方、ALT・GGT・総ビリルビンは基準範囲内です。

現時点では軽度の変化ですが、ALPは過去の検査より高めの値で推移しているため、

今後の推移を確認していきましょう。

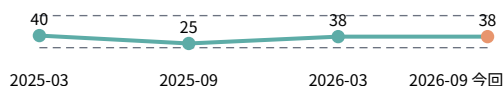
ALT（GPT）

正常

38 U/L

肝臓に多く含まれている酵素です。肝細胞の膜が傷つくと、血液中に漏れ出るため、直前の肝細胞の障害を反映します。 - 数値が高い場合、使用している薬剤や他の臓器による影響 - もありますが、肝臓の異常が疑われます。数値が低いこと自体に、通常病的な意味はありません。一度の単体の数値では判断 - ができないため、再検査やAST・ALP・GGTなどの他の血液検査 - と組み合わせて判断します。

過去推移



アルカリ性フォスファターゼ

↑ 基準値以上

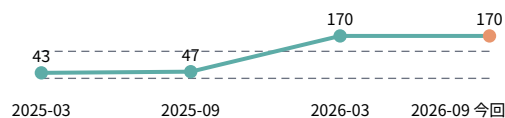
170 U/L

肝臓・胆管・骨など複数の場所に由来する酵素です。数値が高い場合は、胆汁の流れが滞っている状態が疑われますが、 - ストレスや薬の影響、ステロイド性の病気(クッシング症候群) - の影響で上昇することもあります。また、6～8ヶ月齢以下の - 成長期の若い犬では、骨の成長に伴い基準値の3倍以内の上昇 - がみられることがあります。この数値だけで原因を一つに絞 - ることはできないため、リンパ球数などの他の血液検査と組み - 合わせて判断します。

① 経過観察

ALPがわずかに高値でした。今後も推移を確認します。

過去推移



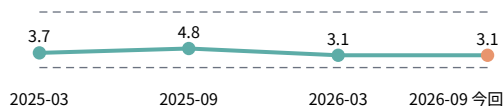
γGTP

正常

3.1 U/L

肝臓・胆管・骨など複数の場所に由来する酵素です。数値が高い場合は、慢性的な胆汁の流れの滞りが疑われますが、 - ストレス・投薬の影響の可能性もあります。数値だけで原因を - 一つに絞ることはできないため、リンパ球数・ALP・TBilなど他 - の血液検査と組み合わせて判断します。

過去推移



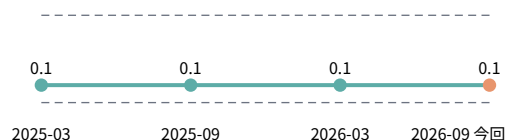
総ビリルビン

正常

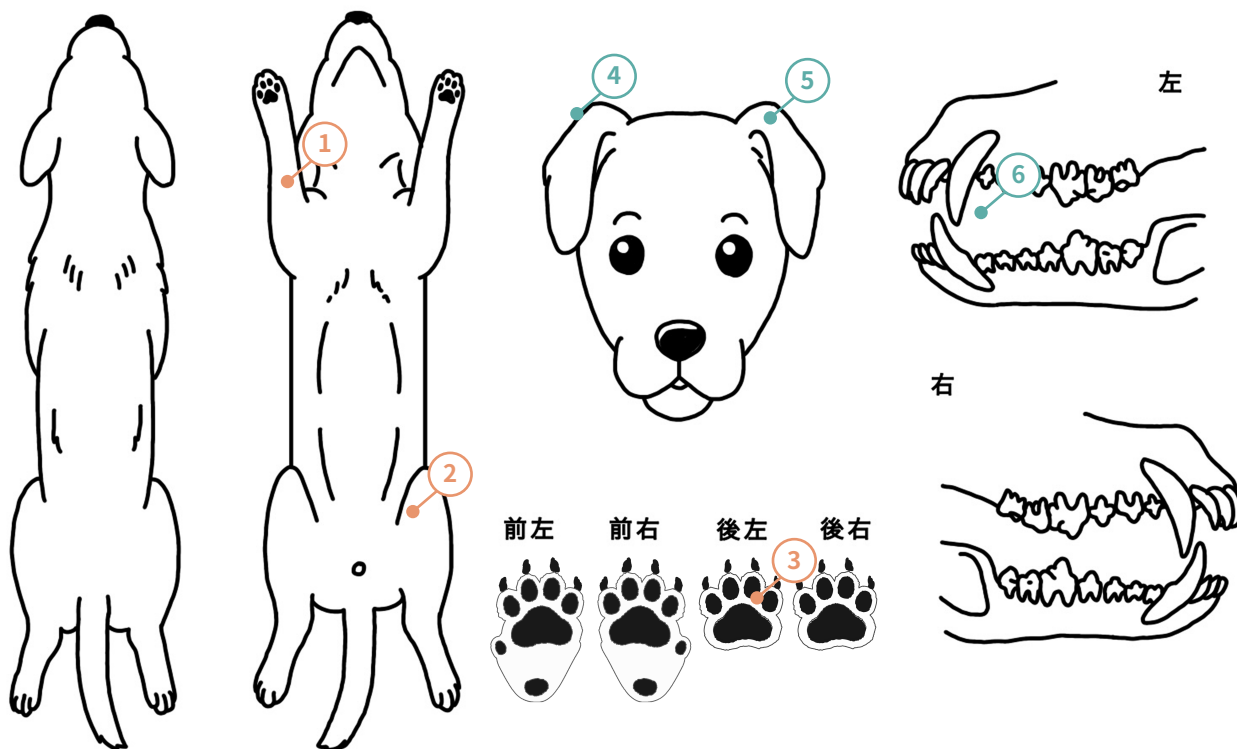
0.1 mg/dL

胆汁中の色素で、多くは破壊された赤血球のヘモグロビンに - 由来します。体内のビリルビンの貯留は白目・歯茎・皮膚に - 黄疸を引き起こします。数値が高い場合には、赤血球の - 異常、肝臓・胆管の異常の可能性もあります。この数値 - のみでは判断できないため、貧血の有無、 - ALT・AST・ALP・GGTなどの他の血液検査や超音波検査などと - 組み合わせて原因を特定します。

過去推移



身体検査



① 経過観察

①②③ 前肢（右）・鼠径部（左）・趾間（後左） リンパ節がやや腫れているようです。経過を見ていきましょう。

✓ 異常なし

④⑤ 耳 特に異常は見られません

✓ 異常なし

⑥ 口腔・歯 特に異常は見られません

BCS

3

✓ 異常なし

理想的な体型を維持できています。
このまま食事管理を続けていきましょう。



1：痩せすぎ



2：やや痩せ



✓ 3：理想体重



4：やや肥満



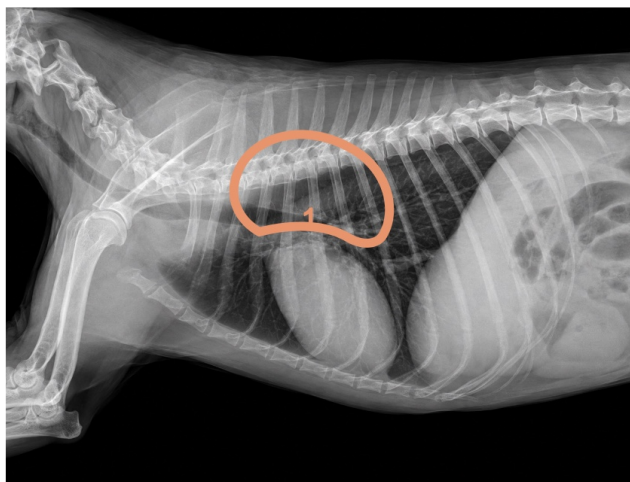
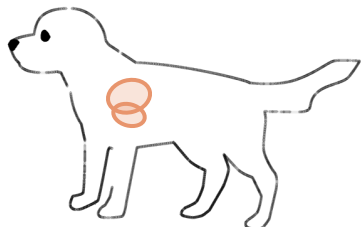
5：肥満

今回撮影したレントゲン画像です。気になる部位には印をつけています。

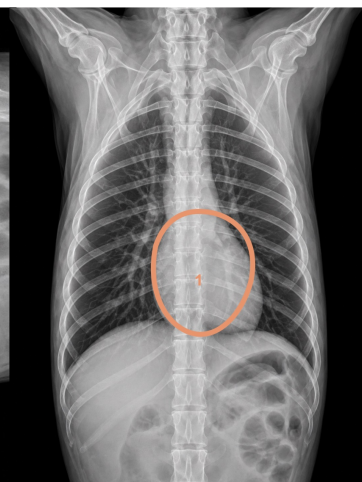
胸部

撮影日：2026-09-02

経過観察



側方 (Lateral) / 横から見た画像



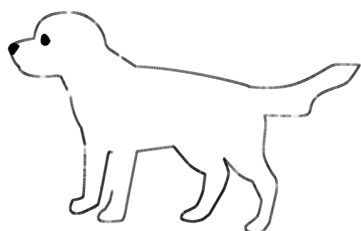
背腹 (VD) / 背中側から見た画像

- 1 心臓 経過観察 心臓の形にわずかな変化がみられます。現時点では大きな問題はありませんが、定期的を確認していきましょう。
- 2 肺 経過観察 肺の一部にやや白っぽく見える部分があります。炎症などでもみられる変化のため、経過を確認します。
- 3 気管 異常なし
- 4 気管支 異常なし

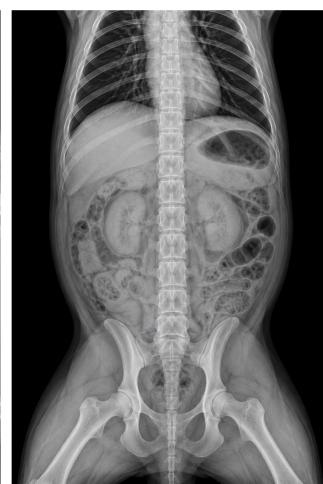
腹部

撮影日：2026-09-02

異常なし



側方 (Lateral) / 横から見た画像



背腹 (VD) / 背中側から見た画像

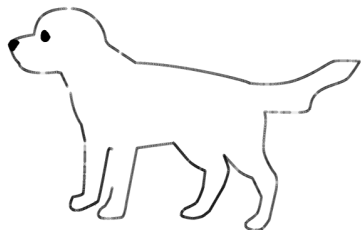
- 1 肝臓 異常なし
- 2 胆嚢 異常なし
- 3 胃 異常なし

今回撮影したエコー画像です。気になる部位には印をつけています。

心臓

撮影日：2026-09-02

異常なし



心臓

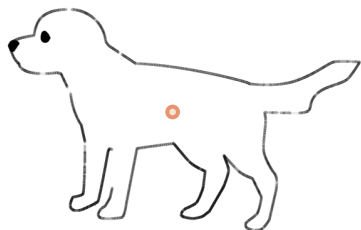
異常なし

心臓の大きさや動きに明らかな異常は認められませんでした。
毎年確認していきましょう。

胆嚢

撮影日：2026-09-02

経過観察



胆嚢

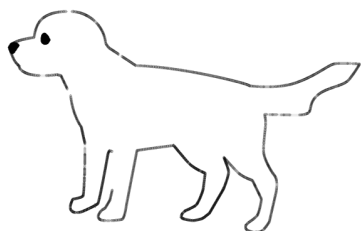
経過観察

胆嚢内には少量の沈殿物がみられるため、
今後も経過を確認していきます。

膀胱

撮影日：2026-09-02

異常なし



膀胱

異常なし

膀胱壁や内部に明らかな異常は認められませんでした。
毎年確認していきましょう。



尿検査

異常なし

採尿方法：自然

色調	黄色
混濁	なし
尿比重	1.036
ブドウ糖	-
蛋白質	-
ビリルビン	-
pH	6.0
潜血	-
ケトン体	-



血液検査

貧血・赤血球

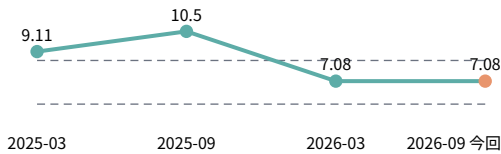
赤血球数

正常

7.08 M/ μ l

血液中の酸素を全身に運ぶ細胞の総数です。ヘマトクリットと連動しており、通常は単独ではなくこれらの数値と合わせて参考程度に見られます。

過去推移



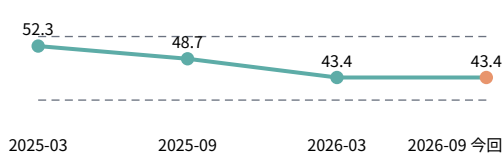
ヘマトクリット

正常

43.4 %

血液全体に占める赤血球の割合です。低い場合は貧血の可能性があり、数値が貧血の重症度を判断する際に用いられます。- タンパク質などの他の数値も上昇している場合は脱水の可能性が高いですが、単独の上昇の場合は原因を他の血液検査や画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移



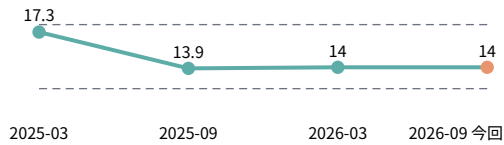
ヘモグロビン濃度

正常

14 g/dl

赤血球の中にある、酸素を運ぶ役割を持つタンパク質の量です。ヘマトクリットと併せて、貧血の有無や検査エラーの判断に用いられます。

過去推移



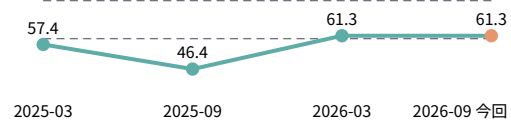
平均赤血球容積

正常

61.3 fl

赤血球1個の平均的な大きさです。ヘマトクリットやヘモグロビン、平均赤血球血色素濃度と併せて、貧血の原因を評価します。

過去推移



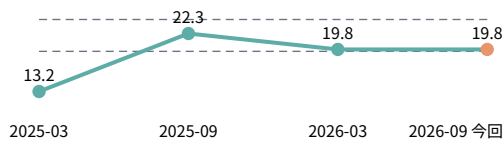
平均赤血球ヘモグロビン量

正常

19.8 pg

赤血球1個に含まれるヘモグロビンの平均量です。MCVやMCHCと近い動きをすることが多く、通常は単独ではなくこれらの数値と合わせて参考程度に見られます。

過去推移



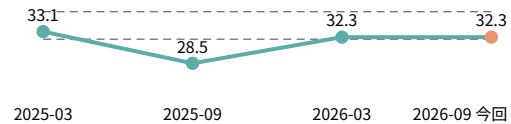
平均赤血球ヘモグロビン濃度

正常

32.3 g/dl

赤血球内のヘモグロビン濃度です。高い場合はほとんどが検査上のエラーによるものです。低い場合にも検査上のエラーの可能性がありますが、他の血液検査や画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移

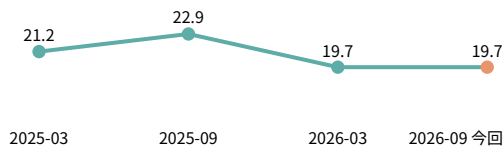


赤血球分布幅

19.7 %

赤血球の大きさのばらつきを示します。高い場合には心臓の異常が疑われます。この数値だけで具体的な原因を特定することはできないため、他の血液検査や画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移

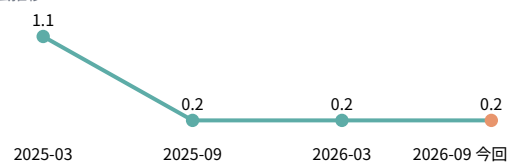


網状赤血球数%

0.2 %

骨髄で作られたばかりの若い赤血球の割合です。貧血がある場合に骨髄が正常に反応しているかを確認します。非再生性貧血（骨髄の問題）と再生性貧血（出血・溶血）の判断に用いられます。

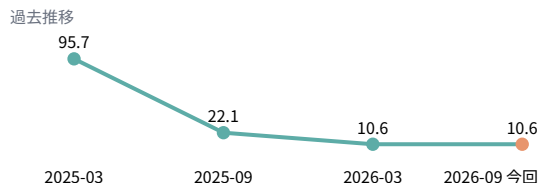
過去推移



網状赤血球数

10.6 K/ μ l

骨髓で作られたばかりの若い赤血球です。貧血がある場合に骨髓が正常に反応しているかを確認します。非再生性貧血（骨髓の問題）と再生性貧血（出血・溶血）の判断に用いられます。



網状赤血球ヘモグロビン

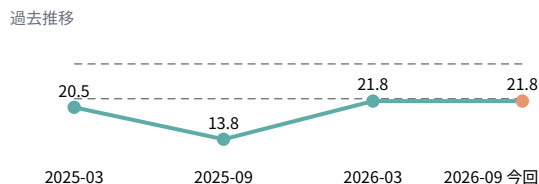
↓ 基準値以下

21.8 pg

網状赤血球（若い赤血球）に含まれるヘモグロビンの量です。他の数値と組み合わせて、鉄欠乏による貧血かどうかを判断する材料の一つとして用いられます。

経過観察

新しく作られた赤血球のヘモグロビン量がやや低めです。今後の推移を確認します。



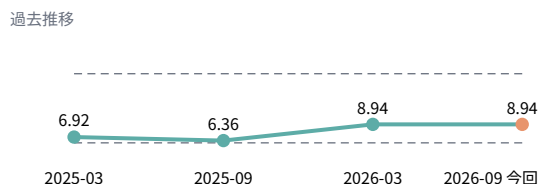
免疫・炎症

白血球数

正常

8.94 K/ μ l

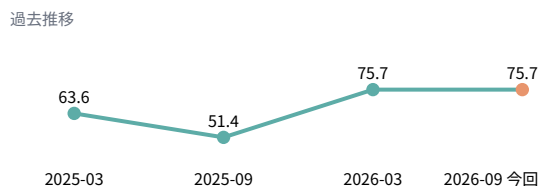
免疫細胞全体の数です。高い場合には、細菌感染や炎症のほか、ストレスや興奮などの原因があります。低い場合には、骨髓の異常・ウイルス感染が疑われます。好中球数や単球数など、内訳と併せてその原因を特定します。



好中球%

75.7 %

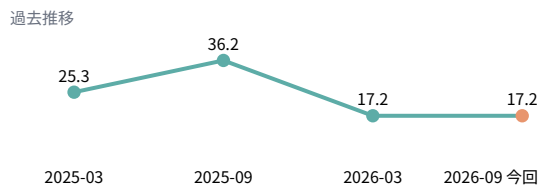
白血球全体に占める好中球の割合を示します。全体のバランスを把握するために使用します。好中球数の異常を正確に判断するには、好中球数と併せて確認します。



リンパ球%

17.2 %

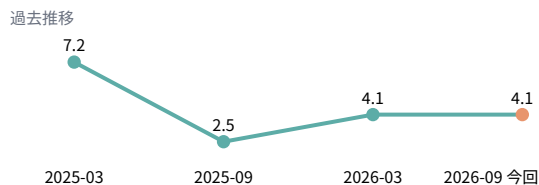
白血球全体に占めるリンパ球の割合を示します。全体のバランスを把握するために使用します。リンパ球数の異常を正確に判断するには、リンパ球数と併せて確認します。



単球%

4.1 %

白血球全体に占める単球の割合を示します。全体のバランスを把握するために使用します。単球数の異常を正確に判断するには、単球数と併せて確認します。

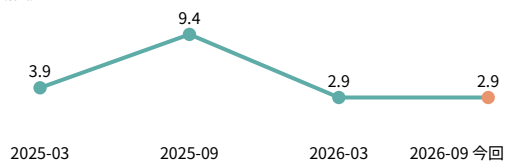


好酸球%

2.9 %

白血球全体に占める好酸球の割合を示します。全体のバランスを把握するために使用します。好酸球数の異常を正確に判断するには、好酸球数と併せて確認します。

過去推移



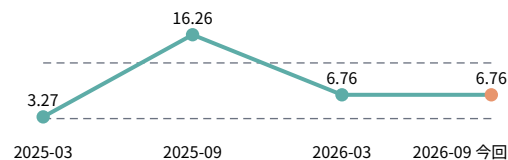
好中球数

正常

6.76 $\kappa/\mu\text{l}$

細菌や異物を食べて退治する白血球。高い場合には、運動後の興奮や緊張、薬の影響の可能性もありますが、感染症や炎症、骨髄の腫瘍性疾患などが疑われます。低い場合には、感染症、特定の薬剤の副作用、骨髄の機能低下が疑われます。この数値だけで具体的な原因を特定することはできないため、他の血液検査や画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移



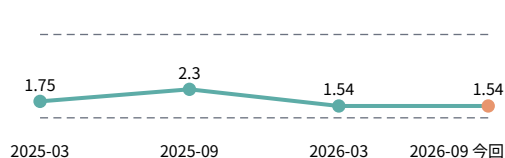
リンパ球数

正常

1.54 $\kappa/\mu\text{l}$

体を守る抗体を作ったり、ウイルスに感染した細胞を攻撃したりする白血球です。高い場合は、ワクチン接種後や慢性的な炎症、まれに腫瘍などが疑われます。低い場合は、ストレスやステロイド治療、感染症・腎臓病などの消耗性の病気が疑われます。この検査のみではどこが原因かは特定できないため、各臓器に応じた他の血液検査や画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移



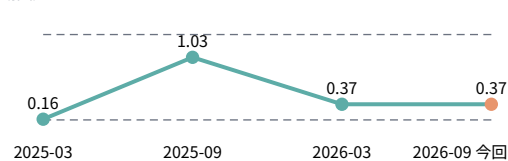
単球数

正常

0.37 $\kappa/\mu\text{l}$

組織の修復や慢性炎症に関する白血球です。ストレスや慢性炎症、体の中での出血、免疫疾患などで数値が上がることがあります。この検査のみではどこが原因かは特定できないため、他の血液検査や画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移



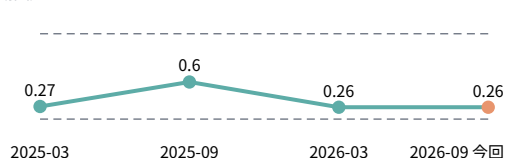
好酸球数

正常

0.26 $\kappa/\mu\text{l}$

寄生虫やアレルギー反応に対処する白血球です。数値が高い場合には、寄生虫やアレルギー性、皮膚疾患、まれに腫瘍などが疑われます。数値が低い場合、ストレスやステロイド治療による影響が疑われます。他の血液検査や画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移

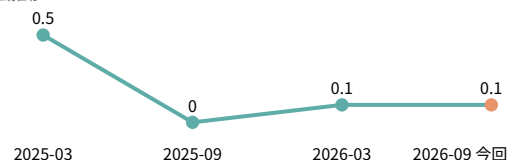


好塩基球%

0.1 %

白血球全体に占める好塩基球の割合を示します。全体のバランスを把握するために使用します。白血球数の異常を正確に判断するには、必ずBAS好塩基球数併せて確認します。

過去推移



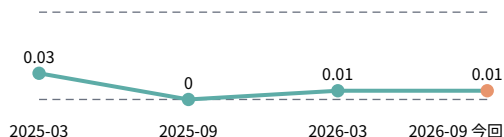
好塩基球数

正常

0.01 $\kappa/\mu\text{l}$

炎症やアレルギー反応に関わる白血球です。高い場合には、炎症や皮膚や粘膜の炎症、慢性的な脂質異常、ホルモンの病気が疑われます。低い場合には、ストレスやステロイド治療の影響の可能性もあります。この数値だけでは判断ができないため、他の白血球や血液検査、画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移



止血・血小板

血小板数

↓ 基準値以下

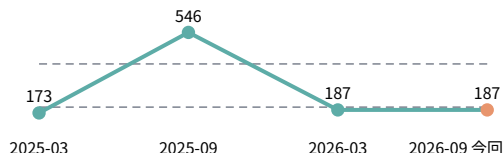
187 $\kappa/\mu\text{l}$

出血を止める役割を持つ細胞の数。数値が高い場合、炎症や腫瘍が疑われますが、ストレスで上昇することもあります。数値が低い場合、検査エラーの可能性が高いですが、骨髄や免疫の異常、大量出血や先天性の疾患が考えられます。この数値だけで具体的な原因を特定することはできないため、他の血液検査や画像診断と組み合わせて原因を判断します。

✓ 異常なし

犬種・猫種による生理的な個体差の範囲内である可能性があります。

過去推移

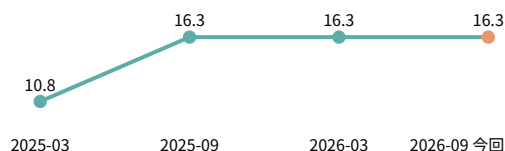


血小板分布幅

16.3 fl

血小板の大きさのバラつきを示します。血小板数と併せて、血小板減少の診断を補助する項目として用いられることがあります。

過去推移

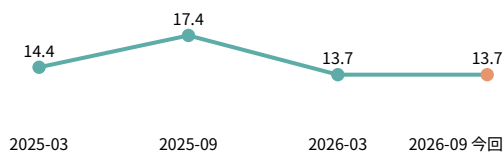


平均血小板容積

13.7 fl

血小板1個の平均的な大きさです。数値が高い場合は、炎症や感染の可能性、骨髄が新しい血小板を活発に作ろうとしていることを示しています。また、一部の犬種では病気がなくても体質的に数値が高く出ることがあります。数値が低い場合は、検査のエラーの可能性もありますが、骨髄の異常、免疫疾患が疑われます。この数値だけで具体的な原因を特定することはできないため、血小板数や血小板の総量など他の血液検査と併せて判断します。

過去推移

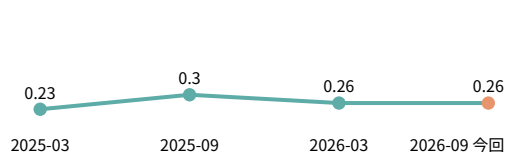


血小板クリット

0.26 %

血液中で血小板が占める体積の割合です。血小板の数が少なく見えても、血小板1個1個が大きい体質の場合はPCTが正常範囲に収まるため、血小板の数が低く出た場合の補助として用いられます。

過去推移



肝・胆道

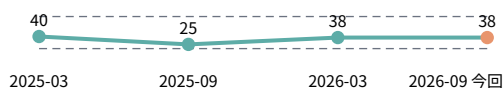
ALT (GPT)

正常

38 U/L

肝臓に多く含まれている酵素です。肝細胞の膜が傷つくと血液中に漏れ出るため、直前の肝細胞の障害を反映します。数値が高い場合は、使用している薬剤や他の臓器による影響もありますが、肝臓の異常が疑われます。数値が低いこと自体に、通常病的な意味はありません。一度の単体の数値では判断ができないため、再検査やAST・ALP・GGTなどの他の血液検査と組み合わせて判断します。

過去推移



アルカリ性フォスファターゼ

↑ 基準値以上

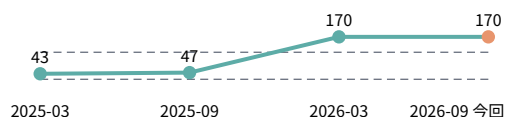
170 U/L

肝臓・胆管・骨など複数の場所に由来する酵素です。数値が高い場合は、胆汁の流れが滞っている状態が疑われますが、ストレスや薬の影響、ステロイド性の病気(クッシング症候群)の影響で上昇することもあります。また、6~8ヶ月齢以下の成長期の若い犬では、骨の成長に伴い基準値の3倍以内の上昇がみられることがあります。この数値だけで原因を一つに絞ることはできないため、リンパ球数などの他の血液検査と組み合わせて判断します。

経過観察

ALPがわずかに高値でした。今後も推移を確認します。

過去推移



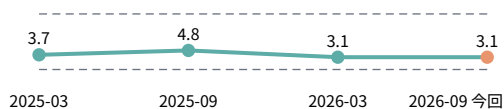
γGTP

正常

3.1 U/L

肝臓・胆管・骨など複数の場所に由来する酵素です。数値が高い場合は、慢性的な胆汁の流れの滞りが疑われますが、ストレス・投薬の影響の可能性もあります。数値だけで原因を一つに絞ることはできないため、リンパ球数・ALP・TBilなど他の血液検査と組み合わせて判断します。

過去推移



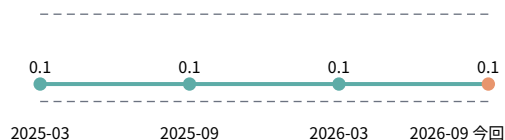
総ビリルビン

正常

0.1 mg/dL

胆汁中の色素で、多くは破壊された赤血球のヘモグロビンに由来します。体内のビリルビンの貯留は白目・歯茎・皮膚に黄疸を引き起こします。数値が高い場合には、赤血球の異常、肝臓・胆管の異常の可能性があります。この数値のみでは判断できないため、貧血の有無、ALT・AST・ALP・GGTなどの他の血液検査や超音波検査などと組み合わせて原因を特定します。

過去推移



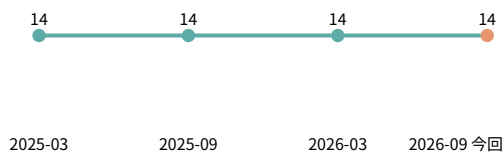
腎臓

SDMA

14 µg/dL

腎臓から排泄される老廃物です。筋肉量の影響を受けにくく、クレアチニンなどの他の腎臓に関する数値よりも異常を早期に発見できる可能性が高い項目です。

過去推移



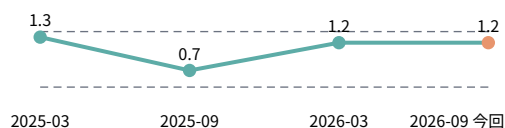
クレアチニン

正常

1.2 mg/dL

腎臓から排泄される老廃物であり、腎臓の濾過機能を反映する代表的な数値です。数値が高い場合には、検査のエラーや高脂血症の可能性もありますが、腎臓の機能低下が疑われます。数値が低い場合には、筋肉量の少なさや妊娠が疑われます。腎臓の状態をより正確に把握するには、血中尿素窒素、SDMAなどの血液検査や尿検査、画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移



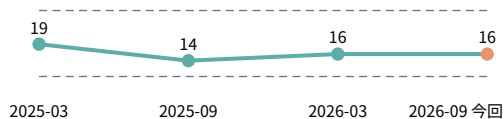
血中尿素窒素

正常

16 mg/dL

タンパク質が体の中で分解された後にできる老廃物で、腎臓から排泄されます。数値が高い場合には、腎臓の機能低下が疑われます。食事による影響、消化管内での出血、発熱・筋肉の損傷・ステロイド投与などによる影響の場合もあります。数値が低い場合には、食事や摂取する水分量の影響も受けますが、肝臓の機能低下、クッシング症候群・糖尿病などの尿の排出が増える病気、妊娠後期が疑われます。腎臓の状態をより正確に把握するには、クレアチニン、SDMAなどの他の血液検査や尿検査、画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移

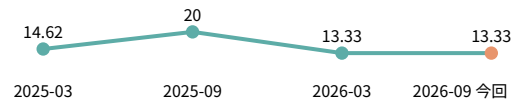


BUN/クレアチニン比

13.33

BUNとクレアチニンのバランスから、腎臓の機能低下の種類を推測する手がかりになる数値です。高い場合には、腎臓以外の原因、クレアチニンの腎臓以外の要因での低下の可能性も疑われます。低い場合には、腎臓の異常が疑われますが、水分摂取量や食事習慣の影響の可能性も疑われます。腎臓以外の影響を受けやすいため、SDMAなどの他の血液検査や尿検査、画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移

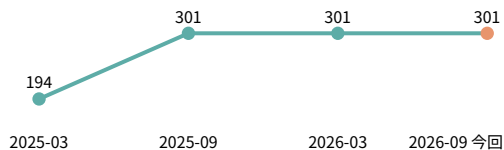


尿中クレアチニン

301 mg/dL

筋肉活動により産生される老廃物です。腎臓から尿に一定の速度で排泄されるため、尿の濃縮度を見ることができます。通常は単独ではなく、尿中蛋白／クレアチン比（UPC）など他の数値と合わせて参考程度に見られます。

過去推移

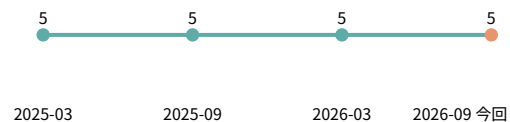


尿中蛋白

5 mg/dL

尿に含まれるタンパク質の量を示します。正常であれば尿中に蛋白は検出されないため、数値が高い場合は、腎臓病や膀胱炎、腫瘍などが疑われますが、激しい運動やてんかんの影響を受けて一時的に数値が上がる可能性もあります。尿の濃度によって変動があるため、尿比重も必ず一緒に確認をします。この数値だけで原因を一つに絞ることはできないため、尿中蛋白／クレアチン比（UPC）などの別の尿検査や腎臓に関する血液検査の項目、画像診断などと組み合わせて判断します。

過去推移



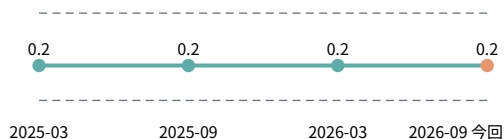
尿中蛋白／クレアチン比（UPC）

正常

0.2

尿中のタンパク質と尿中のクレアチンの比率です。高い場合には、慢性腎臓病やホルモンの病気が疑われますが、細菌感染や血液の混入、その他の臓器の影響で数値が上がる可能性もあります。この数値だけで原因を一つに絞ることはできないため、一般尿検査や腎臓に関する血液検査の項目、画像診断などと組み合わせて判断します。

過去推移



栄養・タンパク

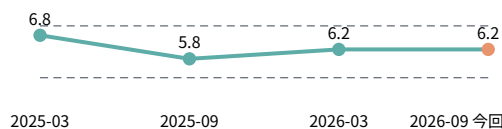
総蛋白

正常

6.2 g/dL

血液中の蛋白質の総量を示し、アルブミンとグロブリンの合計値を示します。Alb、Globの数値と併せて評価します。

過去推移



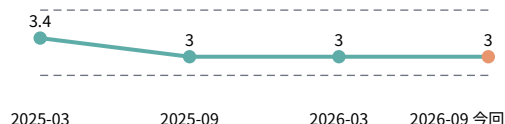
アルブミン

正常

3 g/dL

血液中に多く含まれる肝臓で合成されるタンパク質の一種です。高い場合には、脱水、高脂血症が疑われます。低い場合には、肝臓や腎臓の機能低下、肝臓の機能低下、敗血症、出血、体内の水分量増加などさまざまな原因が疑われます。この数値だけで原因を一つに絞ることはできないため、タンパク質・グロブリンの数値や他の血液検査、尿検査、画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移

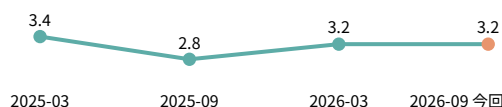


グロブリン

3.2 g/dL

抗体などを含む、免疫に関わるタンパク質です。高い場合には、感染症や炎症、まれに腫瘍が疑われます。低い場合には、肝臓・腎臓・腸の異常や、出血、栄養不足が疑われます。これだけでは原因を一つに絞れないため、タンパク質・アルブミンの数値や他の血液検査、尿検査、画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移



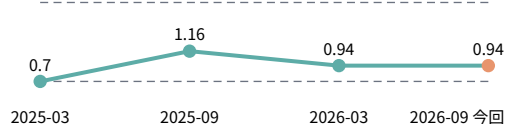
アルブミン/グロブリン比

正常

0.94

アルブミンとグロブリンの比率です。どちらかの値が異常で数値が高い場合には、免疫不全などが疑われます。正常な場合には、出血や体内の水分量増加、腸の異常などが疑われます。低い場合には、感染症や炎症、肝臓の異常、栄養不足、腫瘍などが疑われます。この数値だけで原因を一つに絞ることはできないため、タンパク質・グロブリン・アルブミンや他の血液検査や画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移



糖・脂質

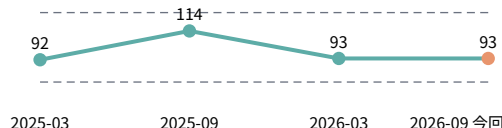
グルコース

正常

93 mg/dL

血液中の糖分の量を示す数値です。数値が高い場合には、糖尿病、ホルモンの病気が疑われます。また、点滴やステロイド薬の影響、採血時のストレス・興奮、メスの発情周期による影響でも一時的に上がることがあります。数値が低い場合には、肝臓・脾臓の異常、敗血症、副腎皮質機能低下症が疑われます。犬種や薬、食事、体質による影響の可能性もあります。検査のエラーでも数値が実際とずれることがあるため、フルクトサミンなどの他の血液検査や、症状、尿検査と組み合わせて判断します。

過去推移



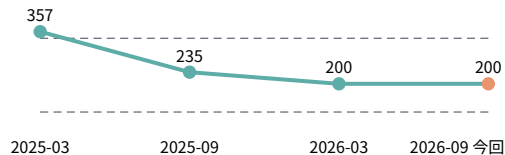
総コレステロール

正常

200 mg/dL

主に肝臓で作られる脂質です。数値が高い場合には、肝臓や胆道、腎臓の疾患や、糖尿病、甲状腺機能低下症などの内分泌疾患など様々な要因で上昇します。ただし、犬種や食事の一時的な影響の可能性もあります。数値が低い場合には、肝臓の機能低下、特に慢性化した重度の肝不全が疑われます。この数値のみでは判断できないため、ALP・GGT・ALBなどの他の血液検査や画像診断などと組み合わせて原因を特定します。

過去推移



ミネラル

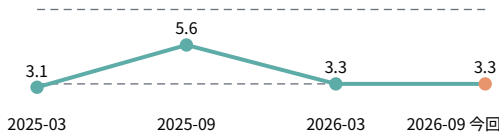
無機リン

正常

3.3 mg/dL

カルシウムと一緒に骨や歯を作る、エネルギー代謝にも関わるミネラルです。数値が高い場合には、腎臓や副甲状腺の異常が疑われますが、成長期の場合やビタミンDの過剰接種の影響を受けて数値が上がることがあります。数値が低い場合には、副甲状腺の異常、糖尿病が疑われますが、ビタミンD不足や出産前後にも影響を受けて数値が下がることがあります。腎臓の状態を評価する際は、カルシウムなどの血液検査や症状、画像診断と組み合わせて判断します。

過去推移



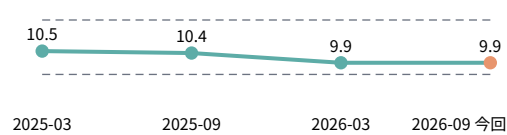
カルシウム

正常

9.9 mg/dL

骨や歯を作り、神経・筋肉・心臓の働きにも欠かせないミネラルです。数値が高い場合には、腫瘍、副甲状腺・腎臓の異常などが疑われますが、ビタミンDの過剰、脱水などで数値が上がることがあります。数値が低い場合には、腎臓・脾臓・副甲状腺の異常、疾患によるビタミンD・カルシウムの吸収不良などが疑われますが、出産後に数値が下がることもあります。アルブミン・リンなど他の血液検査や画像診断と組み合わせて原因を判断します。

過去推移



脾臓

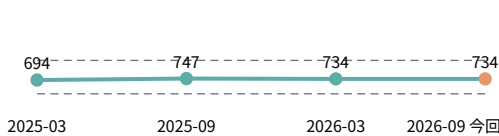
アミラーゼ

正常

734 U/L

主に脾臓で作られるでんぷんを分解する消化酵素です。数値が高い場合には、脾臓の異常が疑われますが、小腸・腎臓・肝臓の異常など、脾臓以外の様々な病気でも上昇することがあります。脾炎があってもこの数値があまり上昇しないことや、逆に脾炎以外の病気でも大きく上昇することもあるため、症状やリパーゼ・脾特異的リパーゼなどの他の血液検査、画像検査と組み合わせて判断します。

過去推移



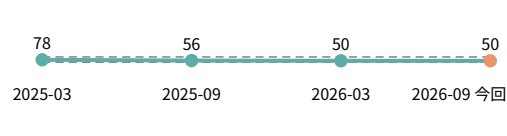
リパーゼ

正常

50 U/L

脾臓で作られ、脂肪を分解する消化酵素です。数値が高い場合には、脾臓の異常が疑われますが、腎臓や腸の異常でも上昇することがあります。脾炎があってもこの数値があまり上昇しないことや、逆に脾炎以外の病気でも大きく上昇することもあるため、症状やアミラーゼ・脾特異的リパーゼなどの他の血液検査、画像検査と組み合わせて判断します。

過去推移



甲状腺

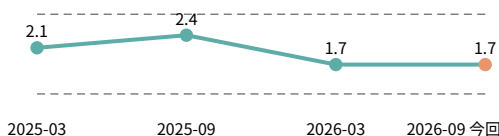
血清総サイロキシン(T4)

正常

1.7 µg/dL

甲状腺から分泌されるホルモンの量を示します。低い場合に、甲状腺機能低下症（ホルモンが足りない状態）が疑われます。単独での診断は難しく、犬甲状腺刺激ホルモンなどと組み合わせて判断します。

過去推移



犬甲状腺刺激ホルモン

↓ 基準値以下

0.04 ng/mL

甲状腺に「ホルモンを作れ」と命令するホルモンです。血清総サイロキシン(T4)と一緒に甲状腺機能低下症の指標として用いられます。

🕒 経過観察

わずかに低値でした。T4は基準範囲内です。

過去推移

